

台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に

## 関する一考察 (五) — 建築様式及び装飾備品を中心に

(一) — 安部 力

はじめに

本稿は、前四稿に引き続いて、現代の台湾（中華民国）の人々、特にカトリック・キリスト教（以下「天主教」とする）信者（以下「天主教徒」）の持つ「宗教意識」を探ることを目的として行った、現地調査報告の続編である(1)。

前稿では「図・像」を中心に事例報告を行ってきたが、本稿では、建築様式やその形状、また建築物の付随品・装飾品、また建築物内の安置物など、「図・像」以外の物を、主な対象とする。訪問調査地域は、前稿同様台北市全域と新北市、基隆市である。

### 一、「建築様式及び装飾備品」を取り上げることについて

前稿では「図・像」を中心に取り上げたが、それは一連の報告において「マリア像」が現代台湾における「宗教意識」を検討する際の、一指標になると考えたからであり、また関連する研究成果を鑑みた結果であった。

今回、従前に加えて「建築様式及び装飾備品」を項目として立てたのは、これも、一連の物件関連報告において、「マリア像」を考察材料として取り上げる場合でさえも様々な視点からの検討が必要であり、またそれらの視点から見られる多様な検討例が、台湾の天主教会（以下、天主堂）に存在することが調査の過程で明らかになったからである。特に、本稿で取り上げる「装飾備品」の内、「神位（位牌）」については、ほぼ全ての天主堂に見られたが、これは「マリア像」に注視するだけでは、対象として取り上げることが難しかったと思われる例である。

更には、前稿で取り上げた「図・像」については、思想的背景として若桑氏や内田氏の研究成果を取り上げたが(2)、その文脈での説明だけでは難しい、「新しい形での宗教意識の表出」例を本報告では取り上げることとなる。このため、

「建築様式および装飾備品」が本稿での項目立てであるが、その項目立てからこぼれる例も、極力拾い上げながら進めていくこととしたい。

本稿の報告趣旨は以上の通りであるが、前稿、前々稿でも若干触れたように、本来、本報告に関連する一連の報告は「現代台湾における宗教意識の表出」であるが、その背景に「一六世紀イエズス会士による活動の影響」についての検討が含まれている。それは一連の最初の報告である拙稿「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察 (一) — 祖先祭祀をめぐる問題」の中で、一六世紀に東アジア地域に到来したイエズス会士の活動が、「現地文化への適応」という方針を持っており、それが結果として一八世紀清朝中国では、イエズス会士追放運動の要因となったことに言及していることから理解できる。

この「典札問題」の要因としての「適応主義」については最近、新たな知見が示されているが(3)、筆者の考えでは、この「典札問題」は現代の東アジアにおいては現在進行形の問題であり、それらの解決を「歴史事実」に見いだそうと企図しているものが一連の報告の趣旨でもある。この「適応主義」は元々、東アジア地域の巡察師であったアレックスサンドロ・ヴァリニャーノ（中国名は范礼安、イタリア人、一五三九〜一六〇六）が示した方針であるが、実際には中国で活動を行った彼の弟子であるマテオ・リッチ（中国名は利瑪竇、イタリア人、一五五二〜一六一〇）が、布教に応用したことから「利瑪竇（的）規矩」と表現されることが多いようである。この言葉自体は、康熙帝が一七〇七年に発した文書に出てくる言葉である（「康熙与羅馬使節關係文書第四」）が(4)、その内実は多岐に渡っている。代表的な点では、「祖先祭祀」「孔子の扱い」「儒教的上帝の取り扱い」「中国人信者への秘蹟の授け方」「聖母マリアの取り扱い」など、リッチの主著である『天主実義』を始めとするイエズス会士の漢文著述の中には、濃厚にこの「利瑪竇的規矩」の特徴が見えるのである。これらに見られる「利瑪竇的規矩」の内実に関する分析は稿を改めるが、本稿ではこれら「典札問題の要因となった適応主義としての利瑪竇的規矩」が現代の、特に台湾において、どのような展開を見せ、そして最終的にリッチらイエズス会宣教師達が目指した「アジア地域へのカトリック・キリスト教の布教」にどのような影響を与えているのかを、現地調査を通して明らかにすることが目的となっている。そのため、前稿で示した「図・像」に加えて、「宗教意識」が表れていると考えられる「建築様式」や「装飾備品」をも取り上げ、また、一連の報告の最初に取り上げた「祖先祭祀」との関連を踏ま

え、日本では一般的には仏壇に置かれる「位牌」についても、その由来を含めて考察することとした。

二、マリア像を祀る屋外聖殿や天主堂の「建築様式」及び装飾物について

以前、本テーマの拙稿「(三三)」で、「51 輔仁大学構内」にある、マリア像などを祀って(安置して)いる、教会敷地内の屋根付き庵のような建造物(以下、「屋外聖殿」とする)に言及したことがある(左上写真)。



51 輔仁大学構内



57 耶穌聖體堂(陽明山天主堂)

これらの屋外聖殿には、マリア像やヨセフ像などを祀っていることが多かったが、中華風様式であるものもあり、興味深かった。例えば、本稿でたびたび取り上げることとなる「57 耶穌聖體堂(陽明山天主堂)」の屋外聖殿は右下のような形状である。類似の形状は、これら以外にも、いくつかの教堂で見ることが出来るが(写真左)、何故このような形状であるのか、当地の神父達からは、明確な



72 聖安多尼朝聖地



89 四脚亭露德聖母朝聖地

回答は得られなかった。例えば、ここで紹介した「89 四脚亭露德聖母朝聖地」のヨセフ像は、左写真の通りである。これを見れば、必ずしも前述の「マリア像」のような、「中華風様式」にする必要は無いし、また、祀られている「マリア像」そのものも、ここでは「純西洋風」のマリア像である。しかし、「マリア像」を祀る屋外聖殿がこのような形状であるのは、何かしら、理由があるのでは無いか。そこで、このマリア像の脇に掲げてあった石版を見ると、次のような文字が彫ら



89 四脚亭露德聖母朝聖地

れていた(写真左上)。そこには、これまでの拙稿の中でも取り扱ったことがある「天上聖母」という文字があり、この称号が本来、「媽祖」に用いられる称号であることを指摘したことがある(5)。更に、この反対側の石版(左下)には「利瑪竇(マテオ・リッチ)」の文字も見え、本稿のテーマでもある「利瑪竇的規矩」との関係を連想させる建築物であった。この文章には次のようにある。「今年(主イエス・キリストの)贖いの聖年(一九八三)にあたり、ちょうど利瑪竇神父が、我が中国に到来して福音宣教を始めて、四〇〇周年である。四脚亭の信者一同は、ここに露德聖母(Lady of Lourdes)の像を建立し、捧げることとする。」



(前半部文章)  
今當救贖聖年適利瑪竇神父來我中華傳福音四百週年四脚亭教友特此修建露德聖母像奉獻給(…略)

以上は、聖母像を祀った「屋外聖殿」の形状上の特徴であるが、「天主堂そのもの形状」が「中華風」である例もある。これについては、以前「33 台北總主教公署」(次頁写真上)の屋根形式を取り上げた際に言及したことがあるが(6)、それ以後の現地調査でも、いくつかの例を発見することができた。



68 聖若望天主堂「中華殉道聖人朝聖地」



71 中和天主之母堂 入口



33 台北總主教公署



同上「中華殉道聖人朝聖地」入口



71 中和天主之母堂 公佈欄



71 中和天主之母堂 教堂



57 耶穌聖體堂 (陽明山天主堂) 屋根裝飾



「福園」門牌 (新北市新店區)



同上「福園」六角堂屋根裝飾 (脊獸)

例えば、この「68 聖若望天主堂」は、二〇一三年に「中華殉道聖人朝聖地」と改称された天主堂である。ここでは、信者協会長の李榮宗氏にお話を聞くことが出来たが、この「中華風」建築様式について尋ねたところ、李氏は「天主教の教会ですが、中華圏で殉教した方々を祀る教会でもあるので、このような形式になっています。私は元々プロテスタントの信者でしたが、カトリックに改宗し、結果としてこのような建築様式を持つ天主堂に勤めています。プロテスタントではこうはいかなかったと思います」と答えて下さった。付言すれば、著者自身が見た限りでの台湾のプロテスタント教会においては、このような「建築様式」を持つ教堂は無く、「カトリック(天主教)」との違いが如実に表れた天主堂であった。

この天主堂の名称である「中華殉道聖人」とは、中国大陸で殉教した一二名のキリスト教神父及び信徒を指した名称であり、一九九六年一月一日の董文學神父を始めとする、二〇〇〇年一月一日までにヨハネ・パウロ二世によって列聖された人々の総称である(7)。この列聖は、台湾(中華民国)天主教教会の要望によるものでもあるとされたため、大陸側(中華人民共和国・中国天主教愛国会及び中国天主教主教団)は「内政干渉であり攻撃的である」として激しく反発した(8)。

以上が、「屋外聖殿」の屋根及び天主堂そのものの建築様式の特徴であるが、前述の「57 耶穌聖體堂(陽明山天主堂)」は、「天主堂屋根の裝飾」にも大変ユニークな特徴を持っている。それが左上の写真であるが、このような屋根飾りは、「脊獸(走獸)」と呼ばれる物で(9)、「脊獸」は元々「五脊六獸」の略称であり、「脊獸」として屋根に付される裝飾である。例えば、左の写真は「王慶安」という人物

の「百歳」を記念して設置された「福園」という公園である(10)。この公園入り口の門牌左右には、向かって左側に聖母マリア像が、右側には六角堂が設置されている。六角堂の中には何も置かれていないが、その屋根の形状は、写真三段目の通りである。この六角堂は、純粹に「中華風建築物」であるので、屋根の裝飾物に「脊獸」があっても違和感はない。しかし、「57 耶穌聖體堂(陽明山天主堂)」の屋根飾りは、「天主堂の屋根裝飾」としては明らかに異質である。何故、このような屋根飾りが天主堂の屋根に施されているのか不明である。元々この天主堂が、近辺にあった駐留米軍の宿舍関係者の礼拝堂として建築されたものであり(11)、建築様式に「中華風」が取り入れられる必然性は無いはずであるが、周辺住民への「配慮」であろうか、「57 耶穌聖體堂(陽明山天主堂)」は屋外聖殿、屋根の形状、更には後述の教堂内天井画、そして本稿では触れないが「門衛獸神像」など随所に「習合」の形跡が見られた。このような屋根飾りとしての「脊獸」は、主に道觀などに見られるものであるが、この「天主堂」にとつては、恐らくパリのノートルダム大聖堂等に見られる「ガルグイユ」がそうであるように、「守護神」(魔除け)的役割を果たしているであろう(12)。その点から見ても、この「57 耶穌聖體堂(陽明山天主堂)」は非常にユニークな「習合」的特徴を有する天主堂であった。

以上が「屋外聖殿」及び「建築様式」「屋根飾り」に見られる「習合」的特徴を有する例である。これらは「外見的」な特徴であり、それは恐らく「周囲への配慮」に基づくものとも考えられる。では、内部の形状はどうなのであるか。内部は本来純粹に「天主教信徒」のための空間であり、周囲にいと想定される信条を異にする人々への配慮は不要であり、それ故、信徒の宗教意識の表れをとらえるために好適の例と言えらるだろう。

### 三、天主堂教堂内における天井画・形状・裝飾備品について

次の写真(右斜め)下は、前稿(四二)の最後に紹介した「57 耶穌聖體堂(陽明山天主堂)」の天井画であるが、その構図から言つて「最後の晚餐」であろう。イエスを取り囲む十二弟子が描かれていると思われるが、どの人物が誰なのかは比定できない。この天主堂は、前述の通り多くの「習合的特徴」持つが、「天井画2」の写真も恐らく「創世記」の「創造の七日間」を描いた物と思われるが、

中心に座っているのは「老人」である。それぞれの「図柄」が「七日間」に厳密に対応していない可能性もあるが、本来「七日目」に休むのは「創造主」である。



57 陽明山天主堂天井画



同上 天井画 2

このような「中華風」天井画がある一方で、同じ「57 陽明山天主堂」には、左上の写真のような天井画もある。これは各格子の中に「白い鳩」が描かれているもので、天主堂に見られる「白い鳩」は、一般的には「三位一体における聖霊」を表わすものである(13)。この点については、この模様は純粹に「西洋的」と言える物であり、この天主堂には「中華風」と「西洋風」が「共存」しているとも言えるだろう。このような「西洋的模様(図柄)」は先に「中華風建築様式を持つ天主堂」として紹介した「68 中華殉道聖人朝聖地」の天井画にも見られる(左下写真)。この十字架には「ぶどうと小麦」が描かれているが、特にぶどうは「命の木」であり、ぶどうの木を植えたぶどう園は「天の国」のシンボルとされ、ぶどうの実で出来たぶどう酒は「キリストの血」を表している。この点から言えば、これらはキリスト教信者者にとつては、非常に「原義」に近いシンボルを描いていると言えるだろう。少なくともこの図柄に限れば、そこに「適応主義」の影響は全く見られない(14)。



57 陽明山天主堂天井画 3



68 中華殉道聖人朝聖地  
天井画



82 聖母升天堂 教堂内部



83 耶穌聖心堂 (基隆市・輔仁大学付属 学校施設構内にある教堂) 内部

この「82 基隆市聖母升天堂」は、前稿でも「媽祖」によく似た「聖母マリア」の図画を持つていることで紹介したが、教堂内部は左上の写真のようになってい



71 中和天主之母堂 天井画



82 聖母升天堂 (基隆市主教座) 天井裝飾模様

その一方で、左上の写真のように「鳳凰」を象ったもの、また、左下のような幾何学的な中華風文様など、バリエーションが多くあるのも、この天井模様(図柄)の特徴であった。これらが選定された経緯を各天主堂で明確にすることができれば、台湾におけるカトリック・信者の宗教意識に迫れると考えるが、左下の写真を撮影した基隆市の主教座聖堂の同宿の方にこの天井模様の意味や選定意図を伺った際には「何故のような模様が天井に付けられているのか私にはよく分かりません。」という答えであった。この点については、今後、様々な天主堂を訪問した際に意識して検討したいと考えている。

天井の形状以外にも柱の上部にある飾りや天井から吊るされている灯籠など、天主教堂内としては非常に文化的多様性に富んだ空間と言えるであろう。また、この右上の写真正面には祭壇があり、そこには「聖櫃(聖体を保存するために聖堂内に設置された箱形の容器)」が安置されている。その聖櫃の形状・模様も、こ



91 法蒂瑪聖母朝聖地 (烏来) 教堂内



91 法蒂瑪聖母朝聖地 教堂内 天井形状

この教堂内の特徴は、正面祭壇上部にある「欄間」にあたる部分が、先の「天井図柄」と組み合わせを為しているようで、何かしらの意図があるように見える。また、その下の写真は、同じ基隆市内にあるカトリック・キリスト教系の大学である輔仁大学付属高校(中学校、小学校、幼稚園も付設)構内の天主堂(礼拝堂)内部を写した物であるが、この教堂内にはほとんど全く「中華風の特徴」を持つものが見当たらなかった。宗教系学校の礼拝堂だからであろうか。  
以上のように「天井画・様式」にも様々な例があるが、これまでの訪問調査で最もユニークであったのが、次の写真にある「烏来」の天主堂である。この天井の形状は一見しても全体像がつかめないが、建物自体が「八角形」をしている。なぜ、このような形状なのかを司祭である蘇崑勇神父に伺ったところ、「信者達の八卦を象った形状にして欲しい、という要望に添った結果、このような形状になりました」と答えられ、少し困惑の表情を浮かべられたのが印象的であった。この天主堂の「キリスト像」や「烏来」という土地柄については前稿(四)で言及したが、他にも多くの特徴があり、今後も詳細な調査を行いたい天主堂である。

の天主堂を始め、各地で特徴的な物が見受けられた。この点についても、以前(拙稿「三」)「5 聖小徳蘭朝聖地」(写真左)などの例を紹介したことがあるが、「91 法蒂瑪聖母朝聖地(烏来)」でもユニークな特徴が見られ、まず、形状が左下の写真のようにになっている。この形状自体が「道観」のような印象を与えるが、そこ



5 聖女小徳蘭朝聖地教堂聖櫃



91 法蒂瑪聖母朝聖地 聖櫃

に施されている「裝飾」は、左のようにになっている(上:聖櫃上部裝飾、中:祭壇上部裝飾、下:祭壇上部図柄)。写真「中」は「鳳凰」で、「下」は「龍」である。「上」は判別しがたいが、先に紹介した「春獸」から類推するのであれば、「押魚」ではないだろうか。それは「魚」は「イエス・キリスト」のシンボルでもあるからである(15)。この「魚」に関する類推が至当であれば、「イエス・キリスト」を「中華文化的特徴」で表現した例と言えるのでは無いだろうか。



上:「押魚」?



中:「鳳凰」であろう。



下:「双龍」

この「91 法蒂瑪聖母朝聖地」以外には、下段の写真にあるような天主堂の聖櫃が印象的であった。これらを見ると、「屋外聖殿」がそのまま教堂内に移設された

ような印象さえある。また、左下の「63 聖方濟沙勿略堂」の聖櫃には「福」という文字が彫られているが、キリスト教の文脈から言えば「愛」の方がふさわしいように思うが、いかがであろうか。何故「福」なのかについて杜敬一神父(イタリア人)に伺ったが、「詳しいことはよく分からない」とのことであった。



82 聖母升天堂 (基隆市 主教座)



63 聖方濟沙勿略 (フランシスコ・ザビエル) 堂 (文山区)

以上が「聖櫃」の形状に見る特徴であるが、一般的なヨーロッパの「聖櫃」には「二体の天使が羽を合わせる」ように向き合っている形状がよく見られるが、「瓦を使った中華風屋根」はあまり見られない。「聖体」を納める箱であるが、問した多くの天主堂にある聖櫃にはこのような屋根が見られた。

最後に、本稿において最も「台湾らしい」裝飾備品を取り上げたい。それは一般的には「位牌」と呼ばれるものであるが、ほとんど全ての天主堂に安置されていたことが印象的であった。この理由についてはしばらく考えてみたいが、台湾は宗教的自由が保障されている国であると同時に、「宗教的雰囲気」が濃密な国でもある。台湾を訪問すれば分かるが、町中の各通りに一つ、と言って良いほど「道観(道教寺院)」があり、またそれに付随して「寺院・廟」も非常に多い。そしてそれらは古びながらも大切にされ、改修や補修を絶えず受けている。つまり、それらの「改修費用」が捻出されるだけの「布施・賽銭」が集まる、ということである。現世利便的な側面も多々あるが、それでもそういった「寄付行為」は大変盛んである。そのような「宗教心(信仰心)」あふれる台湾では、道教と仏教が混淆し、更に儒教的価値観も根付いている(通りの名前に「中山(建国の父孫文の号)」や「長安」など以外に「忠孝」「仁愛」「承德」等の名称があることからもそれらは理解できよう)。そのような台湾だからこそ、「宗教を信じる人々」が多

数おり、その一方で「特定の宗教への帰属意識」も折り重なっている状況に見える。例えば、観光名所である「龍山寺」は「道教系建築物」と「仏教系建築物」が同一境内にあり、参詣者はその境を意識すること無く、巡る。また、寺院に行けば、「護法神」がおり、「道観」に行けば「お釈迦様」も「媽祖」や「文昌帝君」などと同列に祀られている。また「イエス・キリスト」はそこには祀られていないようであるが、しかし、「位牌」に関して言えば、先述のようにほとんどの天主堂で目に出ることが出来る。

元々、「位牌」と言えは「仏教」、というイメージがあるが、加地伸行氏によれば、それは違うそうである(16)。簡単に言えば、仏教で言う「位牌」とは儒教で言うところの「神主(しんしゅ)(または木主(ぼくしゅ))」であり、仏教が儒教から取り入れ、それが日本にも「仏教儀礼」として伝わった、ということである。実際、儒教関係施設で「朱熹(字は元晦、仲晦など、号は晦庵。また朱子、紫陽朱夫子などと呼ばれる。一一三〇〜一二〇〇)」を祀った書院(17)では、次のような「神主(神位)」が安置してある。



泰山区 明志書院



紫陽朱夫子神位

最近の日本人にとっては「儒教の神主(木主・神位)」はなじみがうすいかも知らない。それよりは仏壇の「位牌」の方が思い浮かべやすいであろうから、ここでは「位牌」という言葉を用いる。しかし、加地氏の指摘に由れば、右の写真の通り、儒教の「神主」の方が「本家」である。この「明志書院」に祀られている朱子の「位牌」には「神位」と書かれており、台湾ではこの呼称の方が一般的のようである。この「神位」と書かれた「位牌」は、あくまでも「儒教式」のつつたものであるため、道観や寺廟で見るとはまずない。仏教などの「位牌」には、日本では故人の「戒名」を記すことが一般的であり、それが「儒教由来のもの」であることを意識する人もいないであろう。

しかし、左の写真にあるように、「58 金山天主教聖母堂」には、キリスト教では目にする事が無い「位牌」(それは「仏教のもの」と考えられているから)が、それも「神位」と書かれた「裝飾備品」が存在する。キリスト教的にこの「位牌」をどのように表現・呼称するのか、不明であるので天主堂に安置されている「位牌」を「裝飾備品」と呼ぶ。この金山天主堂の裝飾備品は、本来仏教的なものである「位牌」に、儒教的な文言である「神位」を用いて、天主堂内に安置されている。「習合」というにはささやかな例ではあるが、台湾ならではの「多宗教文化」の折り重なりを表す例と言えるのではないだろうか。この「神位」という文言は、現状この金山天主堂のみであるが、これ以外の天主堂でも、「位牌にあたる裝飾備品」を教堂内に安置している天主堂は大変多かった。それらを見る限り、台湾では「キリスト教」にも「仏教的概念」「儒教的概念」が「無意識」に、取り込まれていると言えるのではないだろうか。



58 金山天主教聖母堂 (やや見えづらいが「芳流徳祖 天主教友歴代列祖列宗神位」とある。)

ほとんどの天主堂に安置されている「裝飾備品」に見える文言で、その「神位」にあたる言葉としては、以下の写真に示すように「靈位」という言葉が多い。それは儒教の「神位」という文言の「神」という文字の持つ概念を、やはりキリスト教的な原義からすれば(18)、「故人」を祀る物に使用することは許されないからであろう。その点からすれば、「靈位」という文言で「故人の靈」を祀る、という発想は(苦肉の策でもあり、智慧としても)理解しやすい。



63 聖方濟沙勿略堂「中華民族列祖列宗靈位」とある。



66 聖三堂(大坪林)「天主教已故神父修士修女 大坪林堂區教友列祖列宗之靈位」とある。

写真が見つからない部分もあるが、以下もほぼ同じ文言が並ぶ例である。



55 聖高隆邦堂「北投天主堂教友列祖宗靈位」とある。



89 露德聖母朝聖地「中華民族歴代祖先之靈位」とある。



59 法蒂瑪聖母朝聖地「淡水聖母堂信友歴代祖先考妣之靈位」とある。



82 聖母昇天堂「基隆聖母升天堂教友祖先之靈位」とある。



81 聖亞納堂「列祖列宗及本堂已故教友恩人之位」とある。



91 法蒂瑪聖母朝聖地(烏來)「中華民族列祖列宗之位」とある。

これら「靈位」以外の文言としては次のような例がある。

これらの「裝飾備品」のはほとんどに「列祖列先」という文言が見える。これから推定されるのは、端的にこれらが「祖先祭祀」を示す道具であると言うことである。「祖先」は「神」ではない。しかし折々に「追慕」をしたい。そのような願いを「形」にしたものが、このような一見、「位牌・神主」に見えるものなのだろう。キリスト教信者にとって、「祈り」を捧げる相手は「神」以外にはない。しかし、それとは違う「祈り」を、台湾の天主教徒が必要としたからこそ、このような「天主堂内の裝飾備品」が生まれたのでは無いだろうか。「信者の願いに応える」宗教的解決として、これらは存在するのだと考える。

このような「教堂内の裝飾備品(神主・位牌のようなもの)」について、前述した「91 法蒂瑪聖母朝聖地(烏來)」の蘇崑男神父に尋ねたところ、「このような物は元々キリスト教にはありません。あまり好ましくないとはいえますが、信者達

の願いでもありましたので、置いてあります」と答えられた。本意ではなさそうであったが、ここにこそ「宗教が異文化に根付いていく」ために必要な条件が示されているのではないだろうか。

キリスト教は元々、中東で生まれ、そして地中海地方を経てヨーロッパへ広まり、その後、世界規模の宗教となった。その過程で様々な「習合」や「変容」を行ったことは歴史的にも事実である。そして一六世紀の東アジアにおいてもそれは同様であり、そこで生み出された方針こそが「適応主義」であり、「利瑪竇の規矩」であった。利瑪竇(マテオ・リッチ)らイエズス会宣教師が中国布教に於いて直面した問題の一つに「祖先祭祀」があり、それらを「儀礼」という形で容認することでリッチらは解決を図り、キリスト教が「異文化の中に根付く」ための最大限の「配慮」を行った。しかし、そこにこそ「典礼問題」の根本原因が胚胎していた。結果として、イエズス会士らは国外追放の憂き目に遭った。それらは端的に「歴史上の失敗」と言える。しかし、現代台湾の状況を鑑みれば、リッチらの方針は、キリスト教布教史上でも行われてきたことであつたし、必要な対応であつた。その智慧は「現在進行形」で活かされていると感じる。「宗教の自由」を保障されている台湾ではあるが、同時にそのような「現地文化に適應するための配慮」も要請され、それに応える形でこそ、宗教が活かされていくのではないだろうか。大陸中国におけるキリスト教布教の現状は、全く「典礼問題」の現代的再現である。そこにリッチらの残した智慧を活用できるのであれば、台湾はその示唆を得られる好個の事例となるはずである。

#### 四、むすびにかえて

以上が最近三年間に現地調査を行って得た知見である。これまでは「各地域」の天主堂を訪問し、そこでのインタビューなどを通して「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識」を探ろうとしてきたが、今後は本稿と前稿とで集約したポイントを中心に、新北市、宜蘭、台中方面へと調査地域を拡大していく予定である。「宗教的自由」が保障されている台湾で、異文化としての西洋文化であるキリスト教がどのように根付いているのか。そこにはどのような「特徴」が見え、それはどのような「意識」を反映したものであるのか。今回取り上げた天主堂には様々な文化的要素が「共在」している空間が多くあつた。これを否定

的にとらえるのか、積極的な評価を与えるのかは各人の自由ではあるが、現代の世界情勢を考える時、また中国とバチカン法王庁との関係や歴史的な典札問題を考える時、そこには有用な知見が多く示されているのでは無いだろうか。

そのような智慧を見だし、現代にフィードバック出来れば、本稿での考察も社会的価値を有することが出来るのではないかと考えている。今後も、「現代的課題解決の糸口」を歴史に見だし、また「歴史的な課題」を解決できるのであれば、どのような方法提示が可能なのか。時間と空間を縦横に行き来しながら、考察を深めていきたい。

#### 《注》

- (1) 「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(一) — 祖先祭祀をめぐる問題 —」(『北九州工業高等専門学校研究報告』 第41号 平成二〇年)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(二) — 「天后聖母」について —」(『北九州工業高等専門学校研究報告』 第42号 平成二十一年)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(三) — 現地調査における現状と課題 —」(『北九州工業高等専門学校研究報告』 第45号 平成二十四年)、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(四) — 図・像を中心に(一) —」(『北九州工業高等専門学校研究報告』 第48号 平成二十七年)
- (2) 『聖母像の到来』(若桑みどり著、青土社、2008年)、『東西文化の翻訳「聖像画」における中国同化のみちすじ』(関西大学東西学術研究所訳注シリーズ14、内田慶市・柏木治編訳、関西大学出版部、二〇一二年)などを参照。
- (3) 桐藤薫『天主教の原像 — 明末清初期中国天主教史研究 —』(かんよう出版、2014年)では、明末来華イエズス会士の布教方針であり、「適応方針」の一つでもある「天主即上帝論」が、清朝中期にいたって破綻した歴史的経緯を描いている。本稿ではこの所論を参照しながらも、「現実的適応実態」としては現代においても未だに「適応主義」の影響を見いだすことが可能なのでは無いか、という視点に立っている。キリスト教が東アジアに「根付く」過程は現在進行形であり、それは中東からヨーロッパ地域にキリスト教が様々な宗教・文化を包摂しながら成長(変容)していく過程を、所を変えてなぞっているのではな

いか、と考えるからである。この点については、霜田美樹雄氏の「ある宗教が広まること、信仰人が増加することはその宗教が教義、礼典において時代的地域的妥当性をもつことであるが、それは他面において異なる地域、時代、民族の諸性向に可能な限り習合できる融通性、弾力性をもつことである。別言すれば、その宗教は教義、礼典において、まず土俗のそれに何らかの形で習合することができなければならない」という指摘に負っている。(『新装版 キリスト教は如何にしてローマに広まったか』早稲田大学出版部、一九九七年)

- (4) 原文は次の通りである。「三月十七日直郡王張常住 奏西洋人孟由義等九人請安求票並履歷摺字 呈 覽 奉 旨諭衆西洋人自今以後不遵利瑪竇的規矩、斷不准在中國住必回去。若教化王因此不准尔等傳教、尔等既是出家人、就在中國住着修道。教化王若再怪你們遵利瑪竇不依教化王的話、教你們回西洋去。…」(中國第一歴史檔案館編『清中前期西洋天主教在華活動檔案史料』第一冊、中華書局、二〇〇三年、一二頁上段を参照。)
- (5) 注(1)所掲、拙稿「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(二) — 「天后聖母」について —」
- (6) 注(1)所掲、拙稿「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察(三) — 現地調査における現状と課題 —」(一三八頁)
- (7) 劉河北『中華殉道聖人簡史畫冊』(台南市聞耳出版社、二〇一三年)を参照。
- (8) 人民日報二〇〇〇年一月一日(WEB版「中国外交部発表声明強烈抗議梵蒂岡《封聖》」<http://www.people.com.cn/GB/channel1/>)を参照。また、このようなカトリックの総本山であるバチカン法王庁(ローマ教皇・教化王)と中華人民共和国政府及び中国天主教会との角逐については、『教廷的國際地位兼論教廷與中國的關係』(杜筑生著、輔仁大学天主教學術研究中心出版、二〇一二年)を参照。本稿執筆者が「典札問題」を「現代的問題」ととらえる理由はここににある。台湾では「宗教的自由」が保障されている結果として「適応主義」が「習合」という形で出現していることが指摘できる。それは「宗教の土着化」であり、またそれ故に「根付いている」とも言える。その一方で、大陸中国では「宗教的自由」はあくまで政府の管轄下の自由であり、そこでは「バチカン法王庁」の「權威」は及ばない。少なくともバチカン法王庁は中国天主教会の司祭叙任権などを認めず、結果、神父が授ける秘蹟についても認めていない。

中国政府側もこのようなバチカン法王庁による「列聖」を「内政干渉」とし、

現在、交渉は進んでいない。「決裂」すれば、それは「典札問題」の再現となる。

- (9) 高藤晴俊『図説社寺建築の彫刻』(東京美術、一九九九)や王抗生『中国伝統図案系列 中国瑞獸図案』(南天書局有限公司、一九九〇年)などを参照。
- (10) 「王公慶安 百齡紀念公園」(新北市新店区新烏路二段一九九巷)
- (11) 吳坤霖「陽明山山仔后美軍眷区住居空間變遷之研究——一個跨文化社群的生活空間」(碩士論文 淡江大学)を参照。
- (12) 飾り物としての「獸神」には「仙人騎鳳、麒麟、鳳凰、獅子、海馬、天馬、押魚、狻猊、獬豸、斗牛、行什」の十一種類が代表的な物としてある。「福園」の屋根には「仙人騎鳳、麒麟、獅子」の像がある一方、陽明山天主堂には「仙人騎鳳や麒麟」は無く、代わりに「象、海馬」があるのが特徴である。なお、「造家寮 建築探偵」HP ([http://www.geocities.jp/edelfalter/arch\\_sekju.htm](http://www.geocities.jp/edelfalter/arch_sekju.htm))には大変有益な指摘があるので、参照されたい。また、パリのノートルダム大聖堂とガルグイユについては、馬杉宗夫『黒い聖母と悪魔の謎 キリスト教異形の図像学』(講談社現代新書1411、一九九八年、第8章)を参照。
- (13) 『キリスト教シンボル事典』(ミシェル・フイエ著、武藤剛史訳、文庫クセジュ950、白水社、二〇〇六年、九五頁)を参照。「白鳩」はこの他に「けがれなき、貞潔」などを表わすこともある。
- (14) 同前掲書七二頁(小麦)一四八頁(ぶどう)を参照。
- (15) 同前掲書七五頁(魚)を参照。
- (16) 加地伸行『沈黙の宗教——儒教』(ちくま学芸文庫、筑摩書房、二〇一一年。元は筑摩書房から一九九四年に出版された)には、次のようにある(五二―五五頁)。「…さて頭蓋骨であるが、死者の頭蓋骨では気持ちが悪いので、しだいに代替物が使われるようになる。最初は魍魎、すなわち死者の顔に似せたマスクである。しかしこれも異様であり、さらに単純化し、象徴化して生まれたものが、木の板で作った神主(木主とも言う)というものである。(…中略)この神主に魂・魄を依りつかせる招魂再生儀礼が、儒教流に言えば、祖先祭祀なのである。(…中略)中国仏教は、この神主を祭ることすなわち祖先祭祀を取り入れたのである。そして神主を位牌と称し、先祖供養をすることになったのである。当然、日本仏教もそれに従っている。」つまり、「(魂のよりどころとしての)位牌」は、元々、儒教(で言う「神主」)から取り入れたものなのである。
- (17) 明志書院(泰山区明志路二段二七六号)は、泰山郷の紳士である胡焯猷が、

私財を投じて建立した書院。一七六三年に建設されたが、一九一〇〜一九二〇年の間に、倒壊。改めて一九二〇年に再建された。

- (18) 東アジアでの天主教布教における訳語の問題、特に「神」については、これまでも様々な問題提起が為されてきた。その点については鈴木範久『カミ』の訳語考(藤田富雄編『講座宗教学 第4巻 秘められた意味』、東京大学出版会、一九七七年、第8章)を始め、大野晋『日本人の神』(河出文庫、二〇一三年、第4章)、海老沢有道『日本の聖書 聖書と訳の歴史』(講談社学術文庫906、1989年)、『ポルトガル エヴォラ新出 屏風文書の研究』(海老沢有道・松田毅一著、ナツメ社、一九六三年)などを参照されたい。

《本稿で取り上げた各天主堂の割り付け番号及び所在地については、前稿を参照。》

・本報告作成にあたっては、平成25年度「国立高等専門学校機構在外研究員区分(B)」による派遣助成を受け、台湾国立台北科技大学(建築系楊詩弘助理教授指導)での滞在研究に従事することが出来た。また、従前同様、現地調査過程では台湾師範大学の藤井倫明氏・金培懿氏に特段の配慮を賜った。併せてここに、特に記して謝意を表したい。

・本報告は、文部科学省科学研究費補助金「基盤研究(C)」(課題番号24520047「来華イエズス会士がもたらしたもの―『天学初函』に見る異文化概念の理解と齟齬―」2012〜2015年度)による研究成果の一部である。

(二〇一五年十一月九日 受理)